# 說林

## 元代南滿洲の交通路について

園田一龜

### 第一章　序言

元代の滿洲交通路に就いては、夙に故箭內亘博士に「元明時代の滿洲交通路」の高著[1]があり、遼東志（第九卷外志）の所記に基き、元・明時代の滿洲交通路を考究し、略ぼ其の輪廓を說明されてゐる。其の考證は當時充分な參考史料に惠まれなかつたに拘はらず、大體妥當であるが、先年東洋文庫が永樂大典本經世大典「站赤」を入手し、是を景印刊行するに至つて、元代支那に實施された驛傳制度と其の驛站の名稱・距離等が明瞭となり、從つて滿洲に於ける當年の交通路もすべて一目瞭然となるに至り、此の「站赤」の記述を基本として當年の交通路を檢討するに、故箭內博士の說明は尙ほ充分とは申し難く、其の交通路の推定は相當に修正せねばならぬ事を知る。一例を擧ぐれば、高麗の忠烈王が至元十五年（忠烈王四年）四月、上都にあつた世祖（忽必烈）に謁見すべく、公主・世子等を率ゐて國都開城を出發し、義州・遼陽・懿州・北京等を經て上都に赴ける際、彼等が通過した道筋の如き、遼陽迤西に於て甚しく明瞭を缺ぎ、果して何れの道を通つたものか、杳杳として捕捉し難い。此點に就いて故箭內博士は、

元代に於いて高麗國の王都開城より西方に赴くものは、必ず鴨綠江を渡り、婆娑府（今の九連城）開州站（今の鳳凰城）を經て遼陽に達し、遼陽より懿州に至るには、瀋陽を迂回するものと、直に西北行するものとの二線あり。懿州より更に西して老哈河邊の北京若くは大寧（今の大名城）に出で、元の帝都燕京に至るものは南に向ひ、上都に赴くものは灤河流域を北行せるなり。[2]

と推定し、就中、懿州の位置を考定する事に少からず苦心し、全力をあげて研究の結果、今の彰武縣城を以て是に擬定し、之を基點として一切の考證を進められた。然しながら

近年懿州の位置は彰武縣城を距る西北約百里の阜新縣塔營子村[3]に當ることが分明した。そこで上都方面に對する交通路の考定も自然根本的の修正を加ふる必要を生じてゐる。

ところで故箭内博士の「元・明時代の滿洲交通路」の中、北滿方面の交通路に就いては、曩に和田清博士が「海西東水陸城站について」[4]と題し、「站赤」所載の經世大典・析津志等[5]の記述に基き、女直水達達路及び狗站、即ち哈爾濱東方・阿城北方に在る海吳站を起點として黑龍江口に近き滿涇站に達する交通路を說明し、故箭内博士の見解を補正されて居る。因つて北滿方面の交通路に對しては重ねて考證の必要がない。尤も北滿方面と申しても海西の西陸路と長白山の東、間島方面への交通路に就いては尙ほ再檢討を必要とする。然し本文は此點に觸れず、單に標題に示すが如く、永樂大典本「站赤」の記述に基き、元の時代、特に今の南滿洲・東蒙古及び朝鮮北部等に亘つて展開されてゐた交通路に限り、其の研究を開陳し、當年の官道を闡明せんことを欲する。



# 第二章　元代滿洲の站赤

## 第一節　站赤の特質

思ふに、元の時代、蒙古朝廷は滿洲及び朝鮮西北部の交通路に對して、中國本土と同樣に元朝獨特の站赤制度を實施してゐた。然も東南の第一線は、遠く大同江を越えて平壤の南に伸びてゐたのである。此の「站赤」は元史に、

站赤者。驛傳之譯名也。蓋以通達邊情。布宣號令。古人所謂置郵而傳命。未有重於此者焉。

と記載せる如く、站赤は蒙古名にして、中國に於ける驛傳の譯名であり、交通路の道筋に驛站を設け館舍を置き驛吏を常駐せしめ、交通輸送に必要なる馬・牛及び車輛等を常備し、四方往來の使臣に對し、宿泊・休憩・飲食等の便宜を供與する目的の下に設置された交通機關であつた。「站赤」に所謂「止則有館舍。頓則有供帳。饑渴則有飲食」と記せるは此事

である。然も此の站赤制度に依つて朝廷の命令は迅速に四方に宣布通達せられ、一方邊境の情勢も、また時を移さず朝廷に報告されてゐた。そこで元代の站赤卽ち驛傳制度[6]は、現代に於ける交通通信機關の完備と同樣の意味を有し、當時に於ては最も卓越進歩せる新施設であつた。

抑も元代の站赤制度の起源は、故白鳥庫吉博士の說[7]に依れば、遠く托跋魏の時代に遡るべく、近世に於ては大體蒙古朝廷の獨創と申してよろしい。そこで當時の交通路にして此の站赤制度を實施せるところが事實上天下の官道たることを明示するものであつた。然らば今の南滿洲及び東蒙古方面に於ては、此の站赤制度はどの程度に實施されてゐたであらうか。また其の官道は何れの方面に向ひ展開されてゐたか、これ頗る興味ある問題である。由來交通の第一條件は、謂ふまでもなく、其の目的地卽ち甲地から乙地に向つて最も安全なる行路を短時日の間に到着する捷徑を選ぶこと、古今を通じて同一である。そこで當年元朝の國都であつた大都（今の北平）が站赤の起點であつた關係上、何人も滿洲方面に對する站赤制度は、必ずや、山海關經由の大道に設置されたものと想像するであらう。これ敢へて先例に徵するまでもなく、一般人の交通常識である。然しながら、蒙古朝廷は站赤の設置に際して此の交通常識を全く無視した。蒙古人はどこまでも蒙古人であり、蒙古人固有の特質を遺憾なく發揮し、道路の遠近、交通の難易等は、すべて度外に措き、あくまでも蒙古の地盤を本位として滿洲方面への交通路を設定したのであつた。此のやうに蒙古朝廷をして蒙古本位の交通路を實施せしめた重因は、站赤制度の根幹が牛馬を主體とする關係上十二分に牛馬の補給を考慮しての措置に相違あるまい。金の時代已に開通してゐた山海關經由の平坦道路は、元の時代に於ても依然存在し、朝廷の勅使は屢々廣寧にある北鎭廟代祀に往來し、高麗の使臣も亦大都への往復に再々此道を通過した事實がある。然し官道としての站赤は全然設置されなかつた。此事は「站赤」所載の「經世大典」及び「析津志」に山海關方面の驛站を記載してゐない事に依りて明白である。

## 第二節　遼陽路の驛站

さて元の時代、東蒙古滿洲及び朝鮮北部に設置された站赤制度は陸站・馬站・脫脫禾孫站の三種であつた。然も是等の驛站は、すべて今の遼陽に置かれてゐた遼陽等處行中書省の管轄する所であり、驛站の總數は一百二十處に達してゐた。此事は夙に元史（卷一百一・兵志第四十九）「站赤」の條に、

遼陽等處行中書省所轄　總計一百二十處、

馬六千五百一十五匹。車二千六百二十一輛。牛五千二百五十九隻。

と記載せられ、其の站赤數と之に所屬せる馬・車・牛の總數は分明してゐた新元史。（卷一百一・志第六十八）の記事は元史の所記と同樣である。然し各驛站の名稱と之に隸屬した馬・車・牛の數量を具體的に細別表示した記錄を見ず、また此種の文獻は發見されなかつた。それが永樂大典本「站赤」の出現に依りて始めて一切が明瞭となつた。卽ち遼陽等處行中書省の管轄に屬した站赤の總數百二十處は、次の如き系統の各機關に隸屬してゐた。然も「站赤」に記された驛站の數及び馬・車・牛等の總數は、元史の記載と完全に一致して居る。此の點元史が經世大典を底本とせること分明である。

左の表に示すが如く、當年遼陽等處行中書省の管轄した滿洲方面の站赤は、先づ行中書省の直轄と遼東道宣慰司の管轄とに二分されてゐた。前者は陸站と馬站。後者は脫脫禾孫站と馬站とを管轄した。然も行中書省の直轄する所は、大寧路二十三處と安撫高麗・瀋州高麗の二總管府所屬の四處であり、遼東道宣慰司の管轄は遼東路四十七處、女直水達達路十八處、遼陽路十八處及び東寧路十處であつた。此の驛站百二十處に配置するに馬六千五百十五匹、車二千六百二十一輛、牛五千二百五十九隻を以てし、各驛站には多數の驛吏を常置し、中國本土と同樣の交通制度を實施してゐた。斯くの如く四方に展開された站赤の區域を、現代の行政區域に依つて觀るに殆ど南北滿洲の全地域に亘るものであり、東北方面の尖端は遠く黑龍江口に伸び、東南は朝鮮の慈悲嶺山麓に達してゐた。そして行中書省は主として東蒙古方面を直轄し、遼東

- 遼陽等處行中書省
  - 驛站總計一二〇處
    - 馬　六五一五四
    - 車　二六二一輛
    - 牛　五二五九隻
  - 直隷省之路
    - 計站　二七處
      - 馬　二四九四匹
      - 車　二九四輛
      - 牛　一七二七隻
    - 大寧路　陸站　二三處
      - 馬　二三五四匹
      - 車　二八七輛
      - 牛　一六五九隻
    - 安撫高麗總管府　站　二處
      - 馬　七〇匹
      - 車　七輛
      - 牛　七〇隻
    - 瀋州高麗總管府　馬站　二處
      - 馬　七〇匹
  - 遼東道宣慰司
    - 脫脫禾孫站　九三處
      - 馬　四〇二一匹
      - 車　二三二七輛
      - 牛　三五三〇隻
    - 遼東路　脫脫禾孫站　四七處
      - 馬　一五一七匹
      - 車　一四九七輛
      - 牛　一五一三隻
    - 女直水達達路　脫脫禾孫站　一八處
      - 馬　七〇〇匹
      - 車　七〇〇輛
      - 牛　七〇九隻
    - 遼陽路　脫脫禾孫站　一八處
      - 馬　一三四二匹
      - 車　一三〇輛
      - 牛　一三〇八隻
    - 東寧路　馬站　一〇處
      - 馬　四六二匹

道宣慰司は南北滿洲及び朝鮮方面を管轄せるものであつた。

## 第三節　站赤の路線

さて析津志（天下站名）によつて元代の滿洲の交通路を通觀するに、大體上遼陽・大寧・驛安の三處が最も重要なる據點であつた。殊に遼陽は遼陽等處行中書省の所在地であり、滿洲統治の中樞地であつた。路線は此の三處から四方に伸び、朝命の傳達と邊情の報告とに利用された。此事たるや、永樂大典本「站赤」の出現しない以前に於ては、全然窺知すべき方法がなかつた。これ故箭內博士が高麗忠烈王の上都に赴ける道筋を推定するに甚しく苦心された所以である。因つて、茲に先づ遼陽・大寧及び驛安を據點として四方に展開された官道を細別すると、次の八線に分つことが出來る。是によつて當年の交通系統は分明するものである。

一　大寧路の交通

1　大都から大寧に至るの線

A　遼化、平泉を通過する線

B　永平・凌源を通過する線

2　大寧から驛安に至るの線

3　大寧から阿木哥大王府に至るの線

4　大寧から上都に至るの線

二　遼陽路の交通

1　驛安から東京に至るの線

2　東京から東驛昌に至るの線

3　驛安から成平府に至るの線

三　東寧路の交通

1　東驛昌から洞仙に至るの線

右の如く滿洲方面に於ける交通路は、先づ大都に發源し大寧に至り、此處から東と北とに分岐し、東は驛安を經て東京・咸平府等に至り、北は高州及び上都に通じてゐた。本文の目的とするところは是等の交通路を說明し、從來不明瞭の官道を闡明することである。

# 第三章　大寧路の交通

## 第一節　大都から大寧に至るの線

大都は當年元朝の帝都にして今の北平である。大寧は析津志に北京とも記し、いま俗に大名城と呼ばる。承德線平泉の西北に在り、遼金時代、中京大定府として知られ、元代初めは北京路であり、次に武平路に改め、更に大寧衞を建て北平都司を置き、永樂元年遂に廢せられた。此處は今や蒙古の邊陬、老哈河畔の一廢城として殆ど見る影もなく荒廢せるも、遼・金・元の三代を通じ、政治・軍事・交通上の重要地點であり、東西南北の人、常に此處に蝟集し、人馬絡繹、頗る殷賑を極めた。然も當年大都に發源した滿洲方面への交通路は通州を經て薊州に到り、此處にて二路に分れ、一路は遵化・灤陽を經て、今の喜峰口から塞外に出で、一路は玉田・永平・建昌營を經て、今の冷口から塞外に出で、二路東西に併行して北進し、今の平泉・凌源附近を經て大寧に到達してゐた。

然も大寧を中心として東は驛安を經て懿州、東京（今日の遼陽）及び咸平府（今の開原）方面に通じ、西は吳家堡を經て上都開平府に至り、北は高州を經て阿木哥大王府に達する官道があつた。沿道の各驛站には均しく站赤制度が設備されてゐたこと勿論である。さて大都から大寧に至る區間の驛站及び道里に就いて析津志（天下站名）は次の如く記して居る。

大都（東四十里至）通州。（六十里）夏店。（一百）薊州。（一百二十里。至此分四路。一路正東至遵化。轉東北至北京。一路東南至玉田。東北行至永平。正北至北京。一路東北行八十里）遵化。（九十里東北）灤陽。（六十里）富民。（百二十里）寬河。（一百里）神山。（一百里）富峪。北京（今大寧。）」

玉田（正東八十里）豐閏。七箇嶺。（八十里）永平。（正北五十里）建昌。（四十）上灤。（八十里）大姑。（九十里）新店。（七十）木思。（六十里）甜水。（六十里）家店。（七十里）城子。（八十里）大部落。北京。（至此分二路。一路正北至阿木哥大王府。一路正東行至驛安。）

とあり、これによつて各驛站の名稱と其間の道里とは分明する。但し析津志に記された方位と道里とは大體に於て確實なるも、中には往往にして錯誤あるを免れない。其の距離の如

き、或は遠きに過ぎ、或は又近きに失するあり、其の全部が正當的確であるとは斷言されない。此點他の文獻と對照し愼重考慮する必要がある。されど驛站の順序によつて其の道筋を推知し得るの利便は多大である。さて大都から今の喜峰口及び冷口に至る間の驛站は、關內の官道に屬し、本文に之を考究するまでもなく明白である。因つて玆には是を省略し、今の長城(關口)迤北、大寧に至るの道、所謂塞外の官道に就いて析津志(天下站名)と經世大典との站名を併記し、其の道筋を考究するであらう。

## A　遼化・平泉を通過するの線

遼化から平泉を通過して大寧に至る官道の站名に就いて、析津志と經世大典との記事に異同あるも、本來同一の地點なることに留意せねばならぬ。(括弧內は經世大典の站名)

灤陽(灤陽站)——富民(柳樹部落)——寬河(寬河站)——神山(神山站)——富峪(富峪站)——北京(在京站)。

右の驛站に依つて其の道筋を推定するに、遼化から東北に進み、灤陽を經て今の喜峰口に至り塞外に出で寬城を過ぎ平泉附近に達し、此處から東北に向ひ大寧(北京)に到達する官道であつた。たゞ當時の站名は現今の地名と一致せず、富民站の如き、之に類似した地名もなく、其の位置全く明かでない。されど次の寬河站[8]は今の寬城であること殆ど疑ふ餘地はない。そこで喜峰口から寬城に至るの中間に富民站が在つたこと確實である。寬河站の次は神山站[9]であつた。神山站は欽定熱河志の記載に照し、平泉の南方に在つた。神山站の次は富峪站[10]であつた。富峪は一に富谷とも記され、大寧に近接した最終の驛站であつた。然も富峪站は、宋の王曾の行程錄に、

自富峪館。八十里至通天館。二十里至中京。

とある富遼館のことにして、遼代の富峪館が元代に富峪站と呼ばれたものである。其の位置は大寧(中京)の西南百里にあたり、いま平泉の東北に黑城子あり、黑城子の南十里に五十家子がある。當年の富峪站は此の五十家子附近に在つたものであらう。清の張穆の「蒙古遊牧記」に大寧喜峰口間の道里を四百八十里と爲し、

案大寧故城。在右翼南百里。喜峰口東北四百八十里。老

河北……。

とあり、一方析津志は灤陽・富峪間の道里を三百八十里と記すあり、之に富峪・大寧間の百里を加ふれば正しく四百八十里となり、蒙古遊牧記と析津志との道里一致する。そこで此の官道が今の喜峰口を出で寛城・平泉を通過せること明かである。然も官道の各驛站に配備された馬・車・牛等の數量は他の路線に比較し最も多く第一位を占むるあり、當時此の官道は大都から大寧に通ずる表街道とも稱すべき特性を備へてゐた。

B　永平・凌源を通過するの線

永平・凌源を經て大寧に至るの官道に在つた站名は析津志と經世大典に次の如く擧げて居る。（括弧内は經世大典の站名）

上灤——大姑（大姑站）——新店（辛店站）——木思（朱四站）——憇水（憇水站）——家店（信家營站）——城子（城子頭站）——大部落（大樹部落站）——北京。

此の官道の道筋は永平から北行し、建昌營・上灤を經て今の冷口に至り塞外に出で、東北に進み、今の凌源附近を過ぎて大寧に赴ける官道と見るべきである。然しながら沿道にあつた驛站の名稱は、遵化・平泉の道に比較しより以上に推定困難である。元代の地名を現今の地名と比較研究するも、全然見當はつかない。たゞ其の道里を基礎として大體の位置を推定する以外に方法がない。試みに地圖を展べて其の距離に照し測定するに、今の叨爾噔が新店、今の凌源が憇水站と見るべく、其他の驛站は此間に存在せるものであり、正確な位置は判定困難である。然し沿道の各驛站に配備された車馬の數量は各站均しく馬六十匹・車十輛・牛六十隻の同數であり、遵化・平泉の官道に配備された車馬數に比較し、著しき遜色あるを見る。殊に此の官道は前者に比し距離的にも稍や遠く、且つ山岳重疊の山道であり、何となく裏街道の感あるを免れない。

右の如く大都から大寧に至る間の交通路は薊州東方に於て二路に分れ、今の喜峰口を經由する遵化・平泉の道と、今の冷口を經由する永平・凌源の道とが存在せるものである。若し

喜峰口經由の道を以て幹線の表街道とすれば、冷口經由の道は支線の裏街道とも申すべく、前者に多數の車馬を配備し、後者に少數の車馬を配置してゐた事は、之が證據ではあるまいか。これ恐らく大都・大寧間を結ぶ距離の遠近と交通の難易とに原因したものであらう。此點尙ほ研究の餘地が存する。

## 第二節　大寧から驛安に至るの線

大寧から驛安に至るの官道は、大都及び上都方面から大寧を經て遼東及び高麗方面に通ずる交通路の幹線であり、同時に北滿方面に對する交通路の幹線を兼ねてゐた。蒙古朝廷が東北經略上、最も重要なる官道であつた。析津志（天下站名）に、

北京。……一路正東行至驛安。……正東一百里　叉道。一百十里。　西部落。七十五里　橋子站。東南七十里　鹿窖。一百二十里　柳樹部落　一百二十里　驛安。

とあり、之れ卽ち大寧から驛安に至る驛站と其間の道里であつた。此間の總里程は五百九十五里にして約六百里であつた。思ふに此の官道こそ當年高麗の忠烈王が上都に赴く際通過した道に相違ない。たゞ今日まで懿州迤西の驛站と道筋が分明してゐなかつた。また經世大典に記載せる大寧・驛安間の驛站は次の如くである。（括弧內は經世大典の站名）

叉道（岔道站）——西部落（西部落站）——橋子站（喬子頭站）——鹿窖（鹿窖站）。

是等驛站の所在地を考定する前提として先づ決定すべき問題は驛安站の位置である。由來驛安站の名は欽定熱河志（卷六十二）に大元一統志（大寧路の條）を引き「東至懿州界驛安站六百里」の文字を記されてゐた。然し此の驛安站が大寧と遼東方面とを結ぶ重要なる驛站であつたことは何人も氣が付かなかつた。それが永樂大典本「站赤」の出現に依つて始めて明白となつた。卽ち析津志の記事によつて懿州の北に驛安があり、其の驛安は遼東方面に對する交通路の最大據點として大寧との間に站赤制度が設備されてゐたものである。

然らば此の驛安站とは今日の何處に比定すべきであらうか。析津志に「驛安。正南百二十懿州熊山。」とある如く、驛安站は懿州を距る正北百二十里の地點に存在してゐた。ところで懿州の遺址は、いま阜新縣東北境の塔營子村（哈爾套街の西

南十五里）に在る土城址である。若し此處から正北に百二十里と云ふ文字を正直にとれば、今の東哈拉勿索附近に驛安站が存在したことになる。されど析津志に載するところの方位と道里とは、時に必らずしも正確とは申されない。之を文字通りに解することは時によつて危險である。況んや驛安站の持つた特殊の地位と交通地理上から考察すれば、今の東哈拉勿索附近を以て驛安站に擬定することは甚しく妥當を缺く。此處は斷じて交通の要衝とは申し難い。因つて此の驛安站は懿州（塔營子）の西北約百里の地點に在る小庫倫舊綏東縣に擬定することが最も適切と信ずる。此の小庫倫は地理上四通八達の位置を占め、東部蒙古交通の要衝である。此の方面に於ては小庫倫を除いて他に驛安に比定すべき適當の場所は存在しない、殊に大元一統志（大寧路の條）は「東至懿州界驛安站六百里」とし、次に「東到懿州七百里」と記せるあり、驛安と懿州との距離は百里であつた事を證明してゐる。此の官道は大寧から驛安を經て懿州に赴くものであり、其の道里は正しく七百里であつた。それで元代の驛安站は今の小庫倫と認定してよろしからう。東哈拉勿索附近にては餘りに遠きに過ぎ地理的にも決して適當の場所とは申されない。

次に第二の問題は當年大寧（北京）と驛安（小庫倫）とを連絡した官道の道筋である。大寧・驛安間の道里は、先づ問題はないが、析津志に記す站名を以て、今の大名城と小庫倫とを結ぶ交通路の地名と對照するに、唯だの一個所も之に類似した地名を見出すことが出來ない。明・清二朝の興廢約六百年、此の方面は全く塞外の荒地として放棄され、蒙古人の放牧地となり、人烟稀少、當年の地名は完全に堙滅してゐる。それで現今の地名は比較的新らしく、之を以て舊名を推定せんと欲するも絶對に不可能である。茲に唯一の手懸りとも申すべきは冒頭に「北京。……正東一百里叉道」と記されてゐる點である。此の文字は大寧から驛安に赴く最初の方向を指示するものとして注目に値する。卽ち最初に正東に向つて發足せること明かである。析津志の叉道は、經世大典には岔道站と記されてゐる。此の名稱は俱に均しく三叉路又は分岐點を意味する。大元一統志（大寧路の條）に「東至金源縣界岔道站

九十里」とある事も同一地點と解したい。析津志に「北京……正東一百里、叉道」とある道里とも略ぼ一致する。然らば其の叉道（岔道站）は、今の何處に相當するであらうか。思ふにいま大名城から東に約百里の地點に葉柏壽（清・乾隆年間の葉博受村）がある。此處は古來交通の要衝にあたり、いま鐵道としては承德線、赤峰線の分岐點であり、道路としては朝陽・小庫倫・平泉及び赤峰等の各地に通ずる分岐點である。此處こそ正しく叉道、岔道站の名を以て呼ぶに相應しい。そこで析津志に見ゆる叉道（岔道站）は大名城からの方位・道里等に照し、今の葉柏壽を指したものと見て、誤りはあるまい。されば大寧から驛安に向ふ第一日の行程は、大名城から葉柏壽に赴けるものと認めたい。さすれば、目指す驛安が今の小庫倫である以上、葉柏壽迤東の道筋を推定すること必らずしも困難ではない。今の小庫倫街道を葉柏壽から東北に向つて北進したものに相違ない。然し當年驛站の設置された地點は地名の相違によつて明確に指摘し難い。たゞ其の道里に照し推測すれば、今の老虎山附近に西部落站、今の設立虎附近に橋子頭站、今の高家梁附近に鹿窖站、今の四不吐附近に柳樹部落站が在り、斯くて小庫倫の驛安站に到達する道筋であつたであらう。箭內博士は懿州・大寧間の交通路を考究し「彰武縣（所謂懿州）から哈爾套街・小庫倫を經て西北に向ひ奈曼王府から烏丹城方面に出でて南下し赤峰附近を經て大寧に至れる」かの如くに述べてゐる。然し今にして之を見れば非常なる錯誤であつた。後に說明するやうに、大寧・上都間の官道は今の赤峰附近から西に折れ、英金河流域を遡り西進せる事實に鑑み、箭內博士の所說は實際の交通路と甚しく矛盾するものである。此の場合箭內博士の推定は著しく北方に偏せるものであつた。思ふに、葉柏壽は昔から交通路の分岐點であつた。その例證として年代こそ稍ゝ下るが、清の高宗の如き乾隆四十八年八月最後の盛京巡幸にあたり、熱河避暑山莊を啓鑾し、道を平泉・凌源に取り、葉博受村（今の葉柏壽）に至り、此地から右に折れて朝陽街道を東進し、今の義縣附近を經て奉天に巡幸した事實がある。此の葉柏壽が古くから交通の要衝であつたこと明かである。

## 第三節　大寧から阿木哥大王府に至る線

大寧から阿木哥大王府に至るの官道は、大寧・驛安間の交通路を幹線と觀れば、其の一支線であつた。されど當時阿木哥大王府は朝廷にとりて重大なる存在であり、大寧から大王府まで站赤が設置されてゐた。從來世人は此の交通路を知るもの少かつた。況んや阿木哥大王府の名稱其物からして全くの初耳であり、大王府の位置の如き已に完全に堙滅し去つて居る。析津志（天下站名）に、

大寧（北京。八十正北。）恩州。（八十里。）花道。（八十里。）狗羣（東北三十里。）高州（正北。）阿木哥大王府。

とあり、是によつて阿木哥大王府が高州の北方に存在したこと確實である。然し析津志は大寧から高州に至る各驛站の道里を記しながら高州から阿木哥大王府に達する距離を缺いて居る。此點は大都・大寧の線に於ける富峪と大寧及び大部落と大寧間の道里を缺けること丶同一である。是がために阿木哥大王府の位置を考定する上に異常の困難を感ずる。また沿道の站名に就いての經世大典の所記は次の如くである。（括弧內は經世大典の站名）

恩州（恩州站）——花道（賈道站）——狗羣部落（狗羣部落站）——高州（高州站）。

さて此の阿木哥大王府とは一體何者の府第であらうか。當時大王府と呼ばれ、特に大寧から站赤が設置されてゐた事實に照し、其の大王府は所謂天潢の分脈・皇室の懿親であつたと見てよろしい。元史を檢するに世祖の孫に荅剌麻八剌（追贈順宗）あり、其の庶長子に阿木哥と稱する皇子があつた。斯人は武宗・仁宗の異母兄にあたり、武宗卽位の後、魏王に封ぜられて居る。仁宗の延祐四年、罪に因つて耽羅（朝鮮濟州島）に流され、次に大靑島（朝鮮黃海道）に移された事實あり、後に大同に徙され泰定元年六月卒去して居る。析津志に阿木哥大王府と記せるは必ずや此の魏王阿木哥の本據を指したるものであらう。卽ち阿木哥が仁宗の延祐四年耽羅島への配流以前、皇兄として威勢を張つた時代の本據を指したものと見たい。然しながら阿木哥大王府の位置と其の領地は今日之を明白に指摘すること困難である。其の大王府は相當に廣大なる遊牧地を領有せる

ものと考へられるも、今日何等の遺蹟をとゞめず、之を推測する方法がない。因つて、析津志に記された大寧・阿木哥大王府間の驛站を逐次に檢討し、大體の位置と道筋とを考究するであらう。

第一站　恩州　析津志に「大寧（北京。八十里北）恩州」とあり、武經總要（北蕃地理）恩州の條には「南至中京六十里」と記し、析津志の所記に比し二十里の差を見る。されど薛映等行程錄には「自中京正北八十里。至臨都館」とあり、其の道里、析津志と相同じき點から見て、析津志の恩州と薛映等行程錄の臨都館とは名稱こそ異なれ同一の場所であつたと認めたい。思ふに、いま大名城から北に七十里、坤頭河の左岸に赤峰街道の石橋頭がある。其の石橋頭の東方五里の地點に土城子がある。此の土城子が恩州[12]の遺址と見たい。此處が遼・金時代を通じ恩州・恩化鎭と稱された所に相違ない。

第二站　花道　花道は經世大典の賈道站である。花道の名は元史木華黎傳に見え、當年蒙古の大將軍木華黎が東京平定の餘威に乘じて軍を高州方面に集結し、北京（大寧）に向つて進攻せる際、金軍の守將銀青が二十萬の大軍を率ゐて花道に布陣し、蒙古軍の進攻を拒戰した史實[13]あるも、然もその位置は元史の記事のみにては推定困難である。されど析津志の記載に依り、大寧の北方恩州と狗羣部落との中間に在つたこと明かである。欽定熱河志（卷九十七古蹟二）が「是花道。在北京之東也。元時曾置驛於此。爲花道驛。今無考」に謂ひ、花道を以て大寧の東に在つたと記せるは誤りである。本來大寧から阿木哥大王府に至る官道は、狗羣西方の吳家堡に至るまでは、大寧から上都に至る官道と同一であつた。然も此の官道たるや、石橋頭の北五十里に在る上燒鍋から、長興店・唐房營子を經て魏家富舖に至る約三十餘里の間は、老爺嶺の山道にして、山路委蛇、巖石磊塊、車行困難の險路である。若し赤峰方面から大名城（大寧）に向つて南下するとせば、當時に於ては是非とも老爺嶺の山道を通過せねばならなかつた。そこで當年金軍の主將銀青が、北京防衛の第一線とした花道は、戰略上此の老爺嶺の天險に在つたものと認めたい。析津志に記すところの花道もまた恩州の北八十里にあつた。其の方位

と道里に照して、花道の位置は正しく老爺嶺の山中にあたる。そこで銀青が蒙古軍拒戰の花道と、析津志の花道とは、必らずや同一の地點であつたであらう。いま石橋頭から北に七十里、老爺嶺の山中、約九百米の高所に在る唐房營子附近を當年の花道（賈道站）に擬定すべきである。此處は赤峰方面から南進し來る蒙古軍を邀擊し、之を捕捉殲滅するに絶好の要隘であつた。然し實際は金軍の方が逆に殲滅されて居る。析津志の花道が老爺嶺の山中にあつたこと疑ふ餘地はない。

第三站　狗羣部落　狗羣部落站の位置に之を明確に指摘し難い。唯だ狗羣部落の東北に高州があり、其の高州の位置と道里とに照し、高州から西に三十里、今の赤峰から東に約四十里、兩地の略ぼ中間、西路嗔河の左岸に在る撒水波附近が、恐らく當年狗羣部落站の所在地であつたと推測したい。大體大寧・阿木哥大王府間の官道は、大寧から今の赤峰街道に沿うて北進し、恩州・花道を經て赤峰附近に至り、此地から東に折れて高州に達するものであつた。此事は今の赤峰附近が上都から東進した官道と、阿木哥大王府に至る官道との交叉點であり、且つは高州の位置に照し、狗羣部落站は赤峰の東方に在つたこと確實である。

第四站　高州　高州の名は遼の時代に起るも、其の位置は未だ明確にされてゐない。然し欽定熱河志（卷六十）に大元一統志（山川）を引き、「塗河。自大寧縣。流至東北入高州。金王景先集賢洞碑記謂。高州南壓塗河。今土河（卽塗河）」云々とあり、また同志に「塗河。源出惠州西北。經州界八十里。東北流。入大寧縣南境。至大寧縣東北境。二百二十里。入高州境」云々と載せて居る。是によつて高州は老哈河（塗河）下流の左岸、大寧の東北に在つたこと明白である。故松井等學士は是等の文獻に基き、高州の位置[14]を說明し、

今の老哈河と英金河の合流する地點に近く、老哈河の左岸に在りし所なれども、その位置を詳かにすること能はず。金史（卷二十四）地理志に、三韓縣の境內に塗河と落馬河とありしと云ふ。塗河は今の老哈河にて、落馬河は今の英金河の北にて西方より老哈河に會流するものにて、蒙古

名を白爾格(Berhe)と云ふ。

とあり、その推定は大體妥當であつた。金史の所謂落馬河とは英金河下流にして、いま赤峰の北を東北に流れ、建昌營子の東にて老哈河に注ぐ西路嘎河の稱である。此のやうに高州の位置を推測する第一の根據は、老哈河と西路嘎河との會流地點に近く存在したことであり。第二の根據は、遼史に「有平頂山」と記し、大元一統志に「平頂山、在高州西北五里。……福德山、楡山、在高州西北三里。……有石洞。號爲集賢洞」云々と記せる事である。殊に「高州の近傍に平頂山・福德山が在つた」との記事は、特に注目すべき史料である。地圖を展べて其の位置を按ずるに、赤峰の東七十里、西路嘎河が老哈河と會流する地點、老哈河の流れに沿うて左岸に土城子がある。此の土城子から北方五里の地點に東元寶山がある。今人の所謂元寶山なる名稱から推察して、之は遼史・大元一統志に見ゆる平頂山と指せるものに相違あるまい。また此の土城子に接近し西北三里の地點に無名の小山がある。此の小山が集賢洞の在つた福德山に比定すべきものであらう。



然も此の土城子は南は老哈河に臨み、赤峰から七十餘里の距離にあり、大名城・赤峰間の九十五里を加ふれば大體二百七十里と爲る。そは析津志に大寧・高州間の官道を、二百七十里と爲せることに一致する。此のやうに土城子周邊の地勢と道里とを綜合考察すれば、此の土城子が當年の高州で在つたことは確實である。尤も大元一統志が大寧縣の條に「北到高州二百二十里」とし、また高州の條に「西南到本路二百二十里」と記せるも、これは同志塗河の條に「至大寧縣東北境二百二十里。入高州境」の文字と同一であり、これ恐らく州境に達する水路の距離と陸路を混淆せるものである。今の赤峰から老爺嶺を通過して、大寧に至る官道の距離と五十里の差違を見る所以であらう。由來高州の位置は全く不明であつた。上述の說明によつて、老哈河畔の土城子を高州の故址と見て誤りはあるまい。

第五站　阿木哥大王府　　阿木哥大王府の位置に就いて、上述の如く、析津志は單に「高州正北」とのみ記し、其の道里を擧げてゐない。從つて其の所在地を推定すること殆ど不可

能である。されど高州（土城子）の東北三十里の地點に、老哈河を隔てゝ小河沿がある。また小河沿の東北三十里には、敖漢右翼旗の海力王府があつた。更に又土城子を距る正北約百里の地點には舊敖漢王府があつた。斯樣に老哈河の下流地域に沿うて蒙古王公の本據がある事は、當年阿木哥大王府の所在地を推定する上にも當然考慮すべきものと思ふ。そこで此の阿木哥大王府は、今日の敖漢旗内、老哈河流域の豐腴なる牧草地帶に存在してゐた事だけは想像される。

要するに大寧と阿木哥大王府間の官道は、大寧から高州に至るまでは略ぼ分明した。然し阿木哥大王府の所在地は推定不可能である。之を的確に指示し得ないことは甚だ遺憾である。然し高州の北百里、舊敖漢王府が阿木哥大王府の遺址とも解せられぬこともない。此の大王府と大寧との間に站赤制度を實施された理由は、いま明白に知ることは出來ない。

## 第四節　大寧から上都に至る線

大寧（北京）から上都（開平府）に至るの官道は、欽定熱河志に大元一統志を引き、

大寧路。西南至大都九百里。西北至上都九百里。

と記せるあり、當時大寧を中心として、既述の如く大都に赴く官道の外に、上都に向つても、又同樣の交通路があつたことを知る。然し其の道筋に就いては少しも觸るゝところがない。此の官道は元朝の滅亡以後全く世人に忘却されてゐたのである。析津志（天下站名）に、

上都正東北二十里。上道。百三十。七箇營。百二十。尖山寨。正東偏南百六十。湧泉正東百二十。新店。至此分二路。一路正北偏東十五里。至松州。一路正東偏南一百一十里。至吳家堡。與狗群道合。

とあり、是によつて大寧と上都とを結ぶ官道の存在せること明確である。勿論此の記述は大寧と上都とを結ぶ直通路として記載せるものではない。然しながら上都から東進した官道が「至吳家堡。與狗羣道合」とある一事に依つて大寧と連絡せること明白である。即ち此の狗羣部落は既述の如く大寧から阿木哥大王府に至る中間の驛站であつた。故に「與狗羣道合」とあることは、上都から東進した官道が、吳家堡に至

り、大寧から阿木哥大王府に赴く官道と連絡したことを意味する。つまり大寧と阿木哥大王府とを繫ぐ官道の中間に吳家堡が在り、此處にて東は、狗羣・高州に向ふ道と、西は上都方面に向ふ道とに分れてゐた。そこで此の吳家堡は大寧・高州・上都に通ずる官道の交叉點に在つたと見てよろしい。

さて析津志の記事に基き、大寧から上都に至る道筋を考究するに、此の官道は赤峰附近から西に折れ、英金河の流れに沿うて遡り、新店・湧泉を經て分水嶺を越え、灤河の上流に至り、西進して上都に赴くものであつた。いまの赤峰から多倫に通ずる街道は、此の官道に相當する。本文は析津志の記事が上都を起點とせることに鑑み、同樣に上都から東方に向つて其の道筋を考究するであらう。

第一站　上道　上道は上都を距ること僅かに二十里の近距離に設置されてゐた。析津志に第一站として其名を見るも、經世大典に站名をあげてゐない。其の位置は寒烟荒草の間に埋沒し去つてゐる。

第二站　七箇營　經世大典には七箇嶺站と記載してゐる。其の位置は的確に推定し難い。その距離に照し、大體上いまの多倫・林西街道の桃來胡蘇附近に比定して差支へはあるまい。

第三站　尖山寨　經世大典には尖山寨站とあり、其の位置は湧泉站との距離から見て、赤峰街道の化木溝附近に在つたものと推定したい。其の現場に尖山の名に相應しき峻峰あるものと思ふ。

第四站　湧泉　經世大典の湧泉站である。此處は尖山寨から正東偏南百六十里の地點に在つた。地名の字義から見て沿道に溫泉の湧出する場所を求むればよろしい。いま赤峰から西に二百三十里、英金河の左岸に近き熱水湯(16)こそ析津志所記の湧泉に相違ない。蒙古遊牧記（翁牛特右翼旗）に「旗西北百十里。有溫泉。北流入英金河」とあり、現に熱河省圍場縣の管下に屬し、今も尙ほ熱水沸々として湧出して居る。遊牧記の北流は南流の誤りである。此の溫泉の存在は、大寧・上都間の交通路を斷定する重要の根據を爲すものである。

第五站　新店　經世大典には辛店站と記して居る。湧泉

から正東百二十里に位置した。思ふに、湧泉から東進する道は、其の地勢上、古くから英金河の流れに沿うて行進する以外全く道らしき道は存在しなかつた。況んや官道をやだ。故に此の新店は其の方位と道里とに照し、熱水湯から東に距ること百二十里、赤峰街道に沿うた今の小樹林子であつたと見るべきであらう。尤も析津志によれば、「至此分二路。一路正北偏東十五里。至松州。」とあり、新店の東北十五里に松州が存在せることを記して居る。

然し松州の位置に就いて大元一統志は「遮蓋山。在松州東南二十里。有古寺石洞石佛」とあり、此の遮蓋山は赤峰の西南五十里、桃來圖の東南山中に在り、金の皇統三年の古碑[16]がある事によつて有名である。此處から西北二十里、桃來圖の西南に城子と稱する土城址あり、これ恐らく大元一統志の松州であらう。此の城子村の土城を松州と認むれば、析津志に記せる上述の松州とは完全に相反する。此點如何に解すればよろしきや。但だ小樹林子の東北十五里の地點に松樹溝がある。松樹溝（Sung Shu kou）と松州（Sung Chou）とは全然關係のない呼稱でもない。相當に考慮する理由はある。然し道里に就いて考究するに、大元一統志は大寧から「北到松州二百二十里」と謂ふ。桃來圖西南の城子を松州の故址と見れば、其の道里は多少の出入こそあれ略ぼ合致する。之に反し赤峰の西百十里に在る松樹溝を松州と認むる場合、大寧と松州の距離は三百二十里と爲り、大元一統志の「北到松州二百二十里」に比するも百里の差がある。また「自高州至松州百五十里」は百九十里と爲り、是等の道里によるも松樹溝を松州と爲すことは妥當でない。析津志に記せる新店東北の松州は、何等かの錯誤であらう。

第六站　吳家堡　此の吳家堡は今の赤峰附近に當る。析津志に新店から「一路正東偏南一百一十里。至吳家堡。與狗羣道合」とあり、小樹林子から東に百十里を進めば正しく今の赤峰附近に到達する。いま赤峰の西方五里、西路嗄河を挾んで南北に土城の對立せるあり、之れが當年の吳家堡に比定すべきであらう。此處が古今を通じて交通の十字街としてその要衝であつた。

之を要するに、上都・大寧間の道里は、大元一統志に「西北至上都九百里」とあり、析津志は上都・吳家堡間を六百六十里と爲し、大寧・吳家堡間を約二百里と記してゐる。兩者を合して八百六十里に爲り、大元一統志の九百里に比し四十里の差を生ずる。其の九百里と云ふは概算の道里であつたであらう。現に多倫から赤峰に至るの道里は、六百三十里と謂はれ、多倫・上都間は八十里である。當時の官道は上都から多倫を經由せず、直に東北に進行せるものであり、吳家堡まで六百六十里の數字が出で來つた。そこで此の官道は上都を起點として、東北に進み、今の多倫・赤峰街道によつて英金河流域に沿ひ東行し、赤峰附近に至り、高州・狗羣に至る官道と合し、更に南下して大寧に達せるものである。

右の推定は單に道里を基礎としての說明である。尙ほ高麗忠烈王の上都行に於ける宿泊地に就いての考察を述べよう。即ち忠烈王の一行が至元十五年四月上都に赴ける旅程として、高麗史に、

五月丁酉。次懿州。

〃　己酉。次北京鍋窰館。

と記せるあり、これ忠烈王の一行が、大寧から上都に向つて直行した有力なる證左である。問題は鍋窰館の三字にあり、鍋窰館の名は、夙に宋の陳襄等の「神宗皇帝卽位使遼語錄」にも「鍋窯館」として其名が見えて居る。陳襄等は治平四年（遼道宗の咸雍三年）六月一日、中京（大寧）に至り、三日中京を發し臨都館に宿泊し、「四日。至鍋窯館。五日。至松山館」とあつて、此の鍋窯館は中京から北へ二日目に宿泊した館舍であつた。その位置は武經總要に「正北八十里。至臨都館。又四十里。至宮室館。又七十里。至松亭館」とし、富鄭公行程錄（契丹國志所收）は「正北八十里。至臨都館。又四十里。至官窰館。又七十里。至松山館」とし、また薛映等行程錄は「至官窯館。又七十里」の八字を脫落して居る。此の鍋窰館は實は官窰館の誤りである。鍋（kuo）は官（kuan）の訛音で窰と窯は同音（yau）である。武經總要に宮室館と記せるは、熱河志に說明する如く、字形の類似による誤記に過ぎない。とにかく大寧（中京）から北に二日程、百二十里の地點、今の赤峰街道・

（契丹交通史料七種所收）

上燒鍋附近に官窰館は存在してゐた。此の遼代の官窰館の名が、元代に至り鍋窰館と訛り、殘存してゐたものである。そこで高麗史に「次北京鍋窰館」とあることは、忠烈王が已に大寧(北京)を通過し、その北方百二十里の官窰館に至り宿泊せる一事のみが記錄されたものであらう。たとへ北京鍋窰館と記してあつても、之を以て大寧城に於ける高麗君臣の宿泊した館舍と考ふべきではない。從つて忠烈王の一行は、大寧から北行し、赤峰附近から西に折れ、英金河の流域を遡り上都に赴けること確實である。大寧から西南に下り、今の承德豐寧の線に沿うて灤河流域を北進せるものではなかつた。要するに、此の上都と大寧とを結ぶ官道は、大寧から大都に達する官道の外に、また大都から西北に昌平・榆林・赤城・獨石口等を經て上都に通ずる官道と連絡するものである、當年大都・上都・大寧の三處を結ぶ循環路として、不等邊三角形の一邊を爲すものであつた。

# 第四章　遼陽路の交通

## 第一節　驛安から東京に至る線

遼陽路の交通は東京(今の遼陽)を以て中心と爲すも、驛安站は之が起點であつた。驛安站は既述の如く、今の小庫倫である。此處が、元の時代、大寧(大名城)に次いで滿洲・朝鮮方面に對する交通の據點であつた。此の驛安站から東京に至るの官道は、元の時代遼東と遼西とを結ぶ交通の幹線であつた。析津志(天下站名)に、

驛安。正南百二十。懿州。熊山。百一十。驛昌。一百。崖頭。正東百二十。彰義。自此分二路。一路正東至瀋州。一路正東偏南至洞仙。

とあり、此の道筋は驛安から南に懿州・驛昌を經て崖頭に至り、此處から東方に折れ、彰義・瀋州に至り更に東京に達するものであつた。此の驛站に就いて經世大典に記すところは次の如くである。(括弧內は經世大典の站名)

驛安（驛安站）――懿州（熊山站）――驛昌（驛昌站）――崖頭（崖頭站）――彰義（彰義站）。

さて此の官道に就いて第一の問題は懿州の位置である。懿州の故址は既述せる如く彰武縣哈爾套街西方の塔營子村の土城である。土城南方に懿州城南學田碑（元・元統二年建）あり、此の土城が懿州なることを立證してゐる。第二の問題は崖頭站の位置である。此の崖頭站は今の何處に擬定すればよろしきや。先づ其の方位から見るに、析津志が「驛安。正南百二十。懿州。熊山」の下に直に、「百二十。驛昌。一百崖頭」とあり、懿州の下に方位の記載なきことは驛安の南方に於て、懿州・驛昌・崖頭の順に南に向つて、並んでゐたものと觀て差支へはあるまい。殊に崖頭に就いては、其下に「正東一百二十。彰義」とあり、之は驛安（小庫倫）を頂點に、崖頭を底邊とし、此處から直角に東に折れて彰義に向へることを意味する。そこで崖頭站は懿州を距る南方二百十里、彰義を距る西方百二十里の地點に存在せること確實である。彰義は金代の章義縣であり、今奉天西南六十里の彰驛站である。試みに北の方、懿州（塔營子）から南へ二百十里、垂直の線を引き、また東の方、彰義（彰驛站）から西へ百二十里、横の直線を引けば、兩線の接觸する地點、卽ち元代の崖頭站でなくてはならぬ。其の方位は正南と稱し正東と謂ふも概略の方位であり、多少南東に偏し、或は東南に偏することも差支へない。之によつて崖頭站の位置を推測するに、彰驛站の西六十里にして遼河の亘流あり、更に遼河の西六十里にして金代の梁漁務がある。梁漁務と彰義の間は正しく百二十里であり、析津志に記せる「崖頭。正東百二十。彰義」と完全に符合する。金代の梁漁務は今の奉山線繞陽河驛の西南に在る大蓮花池西岸の土城址である。此の梁漁務は懿州（塔營子）の東南にあたり、此間の距離は大約二百里内外である。析津志に懿州・崖頭間の道里は二百十里とあり、相互の道里略ぼ符合する。そこで金代の梁漁務が元代に至り崖頭の名を以て稱されたものと推測する。尤も崖頭の字義は河流と無關係なものとは考へられない。いま遼河の流れに沿ひ隨所に大小の丘陵が起伏して居り、崖頭を以て呼ぶに相應しき場所は少くない。遼東志附圖

潘陽中衛山川地理に、遼河の左岸に崖頭大墩の名を見ることも、其の一例である。

さりながら此處に看過し難き一事は高麗の名儒李穡（牧隱）の牧穡詩藁（卷三の三）に載せたる「崖頭驛」の一詩である。曰く、

山遙連絕塞。野闊俯長天。崖驛臨渾水。閭山隔斷煙。聚居人語雜。遞送馬蹄聯。誰知新供奉。行吟獨惘然。

とあり、此詩は李穡が元の順帝の至正八年（A. D. 348）、忠穆王の命を奉じ、李凌幹に從ひ燕京に赴ける途次の作である。故箭内博士も此詩に言及し、之が排列の順序を以て崖頭站の位置を考定する史料とされた。然し排列の順序よりも寧ろ此詩の内容に有力な史料が含まれて居る。即ち「崖驛臨渾水」と謂うて「崖驛臨遼水」と謂はぬ點に注目したい。之れ崖頭站が遼河に沿うて存在しなかつた鐵證ではある。然も「崖驛臨渾水」とある事は、崖頭站が水際に位置せることは示すものであり、金代の梁漁務に擬定する土城子は、饒陽河下流、蓮花池の水際に臨み四十五米の高地に存する。此の繞陽河は金代已に渾河と呼ばれてゐた。即ち金の王寂の「遼東行部志」に、

戊申。次胡土虎寨。胡土虎。漢語渾河也。水邊野寺。舊無名額。殿宇寮舍。雖非壯麗。然蕭灑可愛。……

己酉。行約四十里。過小蘭若。曰建福。臨洮總管蕭卞之祖所創也。其上有浮圖。高出於兩峰間。望之巍然。玉立可愛。……

とあり、王寂は當時胡土虎寨から四十里にして、懿州城外の建福寺を通過して居る。その浮圖と謂ふは、いま塔營子西方に立てる古塔を指せるものであらう。王寂が宜民縣（今の黑城子）から懿州に赴ける道筋を考ふるに、胡土虎寨は今の阜新縣鴛鴦池附近にあたる。鴛鴦池は繞陽河の上流左岸に位し、「胡土虎、漢名渾河也」とあることに照し、繞陽河が金代、渾河と呼ばれてゐた事を證明する。因つて、金代の渾河は元代に於ても同樣渾河と稱されてゐたであらう。李穡の崖頭驛の詩に「崖驛臨渾水」と謂へることは、此の渾河に相違ない。是等の事實に照し、金代の梁漁務と元代の崖頭站とは異名同地と觀て誤らないものと信ずる。

懿州崖頭の中間に在つた驛昌は、距離稍や北に偏せるも、今の大通支線泡子驛西方の驛馬池附近なるべく、驛馬池(I-ma-chih)は驛昌(I-chang)の轉訛であらう。彰義は今の彰驛站であり、析津志は「自此分二路。一路正東至瀋州。一路正東偏南至洞仙」と記すあり、彰義から東は瀋州(奉天)に至り南下して東京に向ふ道と、彰義から直接東京を經て朝鮮に向ふ道に分れてゐた事を知る。此のやうに驛安・東京間の官道は、他の官道に比すれば著しく明瞭である。

## 第二節　東京から東驛昌站に至る線

東京から東南に向ひ東驛昌站(今の九連城附近)に至るの官道は、當年蒙古朝廷が高麗に通ずる交通の公道であつた。此道は遼金時代は勿論、明清時代に於ても同樣であつた。明代、驛站の設備を撤廢せることあるも、其の道筋には何等の變化もなかつた。析津志(天下站名)に、

東京。(南東六十里。)頭館。(正東六十里。)甜水。(正東微南六十五。)連山。七十。龍鳳。七十。斜烈。七十。開州。六十。湯站。四十。驛昌站。(經世大典は東驛昌站と云ふ。)

とあり、東京・東驛昌站間の距離は五百里、其の名稱は二、三の異動を除き現代と同樣である。其の道筋は東京を出で、東南に進み、頭館(いまの浪子山)、甜水站(いまの甜水店)を經て、摩天嶺山脈の北方を越え連山(いまの連山關)に至り、之より龍鳳站(いまの通遠堡)・斜烈站(いまの雪裡站)・開州站(いまの鳳凰城)・湯站(いまの湯山城)を經て東驛昌站(いまの九連城附近)に到達するものであつた。たゞ析津志所載の道里に既述する如く路線によつて著しき差違あり、東京・東驛昌站間の道里の如きも同樣であつた。析津志は五百里と爲すも、攷事撮要・通文館志等は四百里と記し、明かに百里の差を見る。單に遼陽・鳳凰城間の道里に就いて見るも、析津志は四百里、攷事撮要・通文館志は二百九十里、盛京通志は三百里と爲つてゐる。これによつて析津志の道里に對して、時に大いに斟酌を加ふる必要がある所以である。

## 第三節　驛安から咸平府に至る線

驛安から東北に咸平府（今の開原）に至るの官道は、蒙古朝廷が松花江・黑龍江方面に於ける東北の異民族統治のために重要なる交通路であつた。大都から大寧を經て驛安に至り、此の地から咸平に達し、更に海西・女直水達達方面に向つて伸展してゐた官道である。此の交通路は驛安から咸平府に向ふ捷徑として選定せられ、沿道に站赤が設置されてゐた。思ふに、咸平府迤北の地は、遼東路の管轄に屬し、且つ其の地域も殆ど北滿洲の東西に亙つてゐた。本文は咸平府迤北の交通路は之を省略し、驛安から咸平府に達する道筋のみを闡明するであらう。卽ち析津志（天下站名）に、

驛安。東北百五十里。洪州。一百二十五里。寧昌。一百二十里。慶雲。正東偏南。咸平府。大安。

とあり、之れ驛安から咸平府に至る官道であつた。然も此の交通路は、後に遼東志（第九卷外志）に「開原西陸路」として、

慶雲站。熊山站。洪州站。懿州。

と略記されて居る。但し遼東志が慶雲站の次に熊山站とせるは寧昌站の誤りであらう。此の道筋に就いて、また故箭內博士は、

地名の比定完からざるの故に、的確に當時の交通路を考定すること殆んど不可能なり。

と謂ひ、之を想像して、

開原より慶雲を經、其西にて遼河を渡り法庫門より大屯を經て彰武に至る現今の街道と大差なかるべし。(17)

と記述されて居る。されど是はいまの彰武縣城を懿州と認定しての見解であり、現在に於てはこれ又相當修正するの要がある。從來此の官道の難點は洪州・寧昌の位置を何處に比定すべきかと云ふ事であつた。其の比定決せず、其の道筋も遽かに斷定し得ないのであつた。然し今日に於ては必らずしも解決不可能ではないと思ふ。

第一站　洪州　洪州は驛安（小庫倫）を距る東北百五十里と謂ふ。今の小庫倫から東北に博王府街道を行くこと八十餘里、東哈拉勿索南方の「レースンタイ」に至る。此處から東南に折れ白林花を經て七十里を行けば土成子に達する。此の土成子は土城子と同義にして、賓圖王府の西十里の地點に

位置する。此の土成子に古き土城址あり、小庫倫からの距離は百五十里である。所謂「驛安東北百五十里の洪州」は此の土成子の土城址と見るべきであらう。

第二站　寧昌　土成子を滿洲の故址として、更に東に賓圖王府を經て北進し、後新秋哈拉沁屯を過ぎ康平の西方十五里に至れば、此處に又小城子の地名を見る。此の小城子と土成子との距離は、大約百三十里である。之れ析津志の洪州寧昌間の道里に一致する。此の小城子こそ當年の寧昌站址に擬定してよろしからむ。

第三站　慶雲　小城子から東に遼河を渡り、三江口を經て慶雲に達する。慶雲はいまの慶雲堡である。小城子と慶雲堡間の距離は百二十里、析津志の記述と同一である。

第四站　咸平府　元代の咸平府は今の開原である。慶雲堡から東北に四十里の地點に咸平府が在つた。元代の站赤は此處から更に北方に伸びてゐた。

此のように今の小庫倫と開原とを結ぶ交通路が、賓圖王府と康平とを經由する捷徑として存在した。即ち驛安(小庫倫)を起點として東北に進み、東哈拉勿索南方のレースンタイから東南に折れて洪州(土成子)に達し、更に賓圖王府・哈拉沁屯・二牛所口を經て寧昌(小城子)に至り、康平附近を經て遼河を渡り、今の三江口を經て慶雲堡に至り、次で咸平府(開原)に達する交通路であつた。從來此の交通路は判定困難とされてゐた。析津志の記述に基き研究の結果、上述の見解を下す所以である。



# 第五章　東寧路の交通

## 第一節　誼州から洞仙に至る線

元代の東寧路は今の朝鮮西北部の稱にして滿洲とは無關係であつた。元來東寧路は高麗の元宗の十一年(元至元七年)叛臣崔坦等が慈悲嶺迤西・鴨綠江迤東の地を割きて元朝に獻じて蒙古に降つた結果、世祖は此の新領土を東寧路と稱し、平壤を東寧府と改め、遼陽等處行中書省の管轄に屬せしめた

るに始る。爾來二十年、世祖が忠烈王の哀請によつて、之を高麗に還附するまで、東寧路は、中國・滿洲と同樣に、元の領土として、交通上に於ては、站赤制度が實施されてゐた。本文は假に之を滿洲の延長と見て、簡單に東寧路の站赤を說明するであらう。其の驛站は析津志（天下站名）に、

> 誼州。六十。靈州。九十五。宣州。九十。雲興。百二十。安信。九十。都護。九十。肅州。八十五。安定。六十五。東寧。六十。生陽。　洞仙。（其東海。其北接合懶府）

とあり、之によつて東寧路の驛站と道里とは分明する。これ誼州（今の義州）から洞仙に至るの官道であり、站赤制度は東寧路の最南端まで實施されてゐた。終點の洞仙驛[81]は始め今の黃海道黃州に置かれてゐた。後に黃州南方の鳳山に移動された。東寧路の馬站は總計十個所、今の朝鮮鐵道京義線に沿うて存在した。其の驛名は、析津志と經世大典とによつて、二、三の相違を見る。

| 析津志 | 經世大典 | 今名 | 馬四數 |
|---|---|---|---|
| 誼州 | 義州 | 義州南方五十五里 | 四一匹 |
| 靈州 | 靈州站 | 宣州 | 三九匹 |
| 宣州 | 宣州站 | 郭山 | 四九匹 |
| 雲興 | 雲興站 | 定州？ | |
| 安信 | | 安州 | |
| 都護 | | 肅州 | |
| 肅州 | | 順安 | 三九匹 |
| 安定 | 安定站 | 平壤北方二十里 | 七九匹 |
| 東寧 | 林原站 | 中和 | 五三匹 |
| 生陽 | 生陽站 | 黃州・鳳山 | 四四匹 |
| 洞仙 | 洞仙站 | | |

右の馬站十所に配備した馬匹四百六十二匹の中、「站赤」の原本に「安信・都護・肅州」三站の站名及び馬匹數を脫落して居る。七站、三百三十八匹の配置數を記す以外、殘り百二十四匹の配置數を缺いてゐる。思ふに當年蒙古朝廷は高麗を威壓し、一種の保護國化すると共に、東寧路の領有によつて、其の站赤制度は遙かに大同江を越えて慈悲嶺山麓まで延長してゐたものである。

# 第六章　結　言

## 第一節　站赤完備の眞因

右の如く元の時代滿洲の交通路は遼・金時代に比し異常に進歩し、殆ど比較にならぬほど發達してゐた。これ元朝獨特の站赤制度に基因するものであつた。當時雄材大略、英氣四海を蓋ふの概を示した世祖（忽必烈）は廣大なる大元帝國の領土を統治するため、其の國都及び上都を起點として站赤制度を創設し、中國本土は勿論のこと、滿洲・朝鮮の邊境に至るまで遍くこれを實施し餘す所なからしめた。殊に滿洲に於ては大寧を經て驛安に至り、此處にて南北二路に分岐せしめ、北路は開原を經て北滿方面に伸び、遠く黑龍江の下流に達し、南路は遼陽を經て朝鮮方面に通じ、極力朝命の傳達と邊情の報告に利用せしめた。其の規模雄大、當時としては眞に驚嘆に値する施設であつた。此の點は古來均しく滿洲・蒙古に國を建てた高句麗・渤海・遼・金の歷朝が、到底企及し難きところであつた。漠北に崛起した蒙古人のみが前人未到の新制度を創始し、之を最大限度に有效適切に活用し、庶政の運用と軍國の經略に利用したものである。元來此の種の制度は牛馬を主體とした交通機關の整備充實であり、之が實施にあたりては最も多數の牛馬を必要とした。之を遼陽等處行中書省の管轄のみに就いて見るに、馬六千五百餘匹、牛五千二百餘隻の多數に達してゐた。從つて之が完全なる運用は、牛馬補給の一點に繫つてゐた。故に此の站赤制度は日日馬背を家と爲し、牛羊を伴侶として生活した蒙古人にして始めて實行可能であつた。廣漠なる蒙古の草原は牛馬の生產補給に無盡藏の寶庫とも申すべき天惠あり、驛傳制度の完備せること、また當然の歸結と申さねばならぬ。

## 第二節　交通路の等差

然して是等の官道を亘細に檢討するに、均しく同一の使命を有する交通路であり、其の間優劣の差異あるべき道理はな

かつた。然し實際上は其の利用率の繁閑によつて自ら甲乙の差別を生じ、今日の所謂一等路・二等路とも稱すべき區別を產むに至つた。此の事は「站赤」に見ゆる各驛站所屬の馬・牛・車等の數量が間接に之を證明して居る。數量の多寡によつて幹線と支線との別が窺はれる。例へば單に馬匹數に就いて見るに、

| 路別 | 驛站數 | 馬匹總數 | 最大數 | 最小數 | 平均數 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大寧・驛安線 | 四處 | 六〇〇匹 | 一五〇匹 | — | 一五〇匹 |
| 灤陽・大寧線 | 六處 | 八八〇匹 | 二四〇匹 | 一〇〇匹 | 一四七匹 |
| 驛安・東京線 | 六處 | 六四〇匹 | 一四〇匹 | 九〇匹 | 一〇七匹 |
| 大寧・大王府線 | 六處 | 三五五匹 | 一二二匹 | 五〇匹 | 七五匹 |
| 東京・東驛昌線 | 八處 | 五二二匹 | 六八匹 | 六四匹 | 六三匹 |
| 建昌・大寧線 | 七處 | 四二〇匹 | 六〇匹 | — | 六〇匹 |
| 東寧路線 | 一〇處 | 四六二匹 | 五三匹 | 三九匹 | 四六匹 |
| 驛安・咸平線 | 四處 | 一七〇匹 | 五〇匹 | 二〇匹 | 四二匹 |
| 上都線 | 四處 | 一二〇匹 | 三五匹 | 二五匹 | 三〇匹 |

此の表によつて大都から遼化・灤陽を經て大寧に至る線及び大寧から驛安を經て東京に達する二線が、正しく當年交通の幹線であつたことを證明する。之に次ぐものは阿木哥大王府に至るの線と東京・東驛昌站に至るの線であり、其の他の路線は著しく劣るものであつた。また之を北滿方面に設置されてゐた遼東路・女直水達達路等の馬匹數を見るに、

| 路別 | 驛站數 | 馬匹總數 | 最大數 | 最小數 | 平均數 |
|---|---|---|---|---|---|
| 遼東路 | 四七處 | 一五一七匹 | 六九匹 | 三〇匹 | 三四匹 |
| 女直水達達路 | 一八處 | 七〇〇匹 | 四〇匹 | 三四匹 | 三九匹 |

其の驛站數に比し馬匹の數は極めて少數であつた。是を以て前記の大寧・驛安線及び灤陽大寧線等に比較すれば如何、殆ど三分の一以下に過ぎず甚しく遜色がある、之れ全く交通路の地位、交通量の繁閑等に基因する。然も一面に於ては又、蒙古朝廷の政策を反映せるものであり、其の重點が那邊に注がれてゐたかを物語るものである。交通路已に然り。個個の驛站に於ても馬・車・牛等の配置に著しき差異を見る。全體が一律無差別ではなかつた。各驛站の持つた重要、非重要性に鑑み、これ又相當の區別があつた。例へば馬百匹以上を備

へた大寧・神山站・柳樹部落站・驛安站・懿州站・高州站等の如きは、今日に於て所謂一等驛に相當するものである。就中大寧（在城站）の如きは馬二百四十四、車七十輛、牛百隻を保有し、南北滿洲の全驛站一百二十處を通じ、其の第一位を占めてゐた。之に依つて見るも當時滿洲・蒙古に於ける大寧の重要性を窺知することが出來よう。

## 第三節　交通路の生命

さて上述の交通路を通觀するに、元朝滅亡して玆に五百八十年、蒙古及び北滿洲方面は、明・清の二朝、俱に均しく邊外の地域として放棄せるも、元代の官道は今も尙ほ交通路としての生命を保ち存在して居る。由來交通路は、政治的中心都市の興廢と交通機關の進步發達に伴ひて消長あり、現在是等の官道は鐵道の開通とは別個に地方的の交通路として利用されて居る。南滿洲方面に於て全線の交通路を通じ、廢道と化せるものは、僅かに奉天から彰義・崖頭・懿州を經て小庫倫に連絡する區間に限られ、其の他の交通路は昔のまゝに利用されてゐる。

由是觀之に古來交通路は天災地變、或は特別の事情發生しない限り容易に變動するものでなかつた。之は顯然たる事實である。たゞ此の官道を交通地理上から觀れば、當時蒙古朝廷は、滿洲に於ける交通の重點を大寧と驛安とに置いた關係上、交通の必須條件たる最短距離の捷徑を撰ぶことに失敗して居る。例へば、

其一、若し大寧を本位として遼東方面への捷徑を求むれば、大寧から今の葉柏壽・朝陽・義州を經て北鎭に至り、此處から正東に崖頭站に至る金代の道をとり瀋州に通ずべきであつた。それを葉柏壽から東北に向ひ小庫倫迂回の道をとつてゐること。

其二、若し上都を本位として遼東方面への捷徑を求むれば、英金河流域を下つて赤峰に至り、此處から東に今の小河沿・下窪・鄂爾吐板を經て小庫倫に至り懿州に向ふことが直線コースであり、隨一の捷徑であつた。されど大寧を本位としての交通路であるため、此の迂回路をとつて居るこ

と。

交通路の施設一切が大寧・驛安を中心としての交通路であり、道路の遠近などは全く問題ではなかつた。此のやうに元代の南滿洲の交通路は、如上の說明によつて、或る程度まで年來の疑問を解決し得たものと信ずる。

最後に此の交通路の中、元の上都から高麗の開城に至る道を一線として通觀するに、今を距ること約六百七十年の昔、高麗忠烈王は國都開城を出で、慈悲嶺を越えて東寧路に入り、平壤(東寧府)・義州を經て鴨綠江を渡り、開城(鳳凰城)連山關を過ぎて遼陽(東京)に至り、更に奉天(瀋州)を經て遼河を越え崖頭・懿州を經て小庫倫(驛安站)に達し、此處から西南に折れ鄂爾吐板・寶國圖・葉柏壽を經て大名城(大寧)に至り、此處から又北進し赤峰に達し、之より西に折れ英金河の流れを遡り、熱水湯(湧泉)川心店を經て、分水嶺を越えて多倫の北方に出で、閃電河の流域を西進し、始めて上都に到達したものであつた。東寧路の洞仙站(黃州)から上都に至るの全行程約三千三百里、忠烈王が此の間大した不便もなく一路行進し得たことは、全く站赤制度の賜物であつた。其の交通機關の完備せること前代未聞であつた。世祖の至元十五年は我が弘安元年にあたり、越えて三年、所謂弘安四年の蒙古襲來となつた。當時此の官道は蒙古朝廷の使臣が頻繁に往來し、或は十萬の蒙古兵が高麗に向つて節節東進したところである。思うて無限の感慨を禁じ難い。

(昭和十九年一月十五日稿、昭和二十年二月二十日補正)

(1) 滿洲歷史地理第二卷參照。
(2) 滿洲歷史地理第二卷參照。
(3) 滿洲金石志稿第一册(一一七頁)參照。
(4) 和田清博士著「東亞史論叢」(五四五頁)。
(5) 滿鮮地理歷史研究報告(十五)二九三頁參照。
(6) 羽田亨博士著「元朝驛傳雜考」參照。
(7) 東洋學報第十八卷第二號參照。
(8) 寬河は欽定熱河志(卷九十七)に「寬河故城。在平泉州南一百十里。喜峰口外。……」とあり、また「寬河卽今之寬城。在州城之南。爲今平泉州南境地」とあり、平泉からの道里略ぼ符合

する。清の高士奇の「松亭行紀」に寬城のことを載す。

(9) 神山は欽定熱河志(卷六十一)に大元一統志を引き「神山縣、惠州有廢神山縣。元龍爲神山站」とあり、また同志(卷六十六)に「拜察山。漢名神山。在平泉州。屬喀喇沁右翼南一百五十里。……」とあり。

(10) 富峪站は欽定熱河志(卷九十)に、「富谷館。在平泉州東北境內。元一統志載。大寧路古蹟。舊富峪有站」とあり、蒙古遊牧記は「富谷卽富峪」と斷定して居る。此事は路振乘軺錄に「富谷(音浴)館」とあり、富峪站は大寧西南百里の地點にあたる。

(11) 阿木哥に就いては元史(第十五)順宗の條に「子三人。長阿木哥。封魏王。郭出也。妃所生者。曰海山。是爲武宗。曰愛育黎拔力八達。是爲仁宗。……」とあり。阿木哥に關する詳傳は元史・新元史及び高麗史參照のこと。

(12) 恩州は遼太宗の建つる所。遼史(地理志)に、「恩州。懷德軍下刺史……太宗建州。開泰中。以渤海戶實之」とあり、治所を恩化縣と謂ふ。大元一統志(古蹟)に「恩化鎭。金天春二年。廢恩州。爲恩化鎭。入大定縣。其故城爲傳舍」とあり。

(13) 元史(列傳)木華黎傳に「統諸軍征遼東。次高州。盧琮金朴。以城降。乙亥。裨將蕭也先。以計平定東京。進攻北京。金守將銀青。率衆二十萬。拒花道。逆戰敗之。斬首八萬餘級」云云とあり。

(14) 滿洲歷史地理第二卷五九頁參照。

(15) 熱水湯に就いて「滿洲古蹟古物名勝天然紀念物彙編」圍場縣の條に「熱水湯。英金河岸北一里餘。該泉。面積週圍二畝許。泉水四出。細流如縷。中有大泉一。形如鍋底。深三尺餘。熱如湯沸水、湧出東南流。二十餘步、土人控坑注之。煮米爲熟……」とあり。

(16) 滿洲金石志稿第一册參照。

(17) 滿洲歷史地理第二卷「元明時代の滿洲交通路」參照。

(18) 增訂東國輿地勝覽(卷四十)黃州の條に「古洞仙驛。今移鳳山」とし、また鳳山の條に「洞仙驛。在郡北十五里。舊在黃州。臣鎭路廢、移置于此」とあり。